

幼児の言語学習に関する発達と教育



飽田典子

一、アメリカにおける言語研究の動向

幼児の言語教育に関して、アメリカでは社会的階層による比較研究がよく行なわれる。これは、「合衆国」という一つの巨大な共同体がもつ特殊性に即応した姿勢と解釈されるが、このような比較研究は、一応単一民族集団とみなされるわが国の実情に、何を示唆するだろうか。

二、創造主義と修正主義

ベリル・ロストマン・ベイリイ (Beryl Lostman Bailey) は、「社会的に不利な立場にある家庭の子どもの」、「言葉に付随する困難な問題」について述べている。(『Early Childhood Education

Rediscovery』 Edited by Joe L. Pross. P. 402~404) アメリカで

は、言語教師という専門の教育領域が制度的に確立しているようであるが、その言語教師たちの間で、いわゆる創造主義(表現の創造性と自由を主張する立場)と修正主義(言語は正確でなければならぬと主張する立場)が区別されることを紹介し、子どもが真の意味で言語表現的になるためには、前者に則ることが必要であることを説いている。

ここでは、「社会的に不利な立場にある子どもたちは、言語的欠陥を負っている」との前提に立って述べられているが、我々はこの前提を越えて、言語的欠陥児一般に該当する見解として、多くを示唆される。

修正主義者たちが強調するところによると、正しい文法、正しい

い発音、そして正しいアクセントを用いることは、他の社会的行動のように、不利な立場にある人々を（社会的流動性の中において）向上させる鍵になる。したがってなすべきであるとかわかっていいる事柄は、早い時期から着手すべきである、という。けれども、ベイリイは、このような修正は、子どもの「表現したい」気持ちを抑えつけることになり、その結果、子どもは言語を全くもたなくなるのではないかと恐れている。

言葉というものは、不漸の使用によって盛んになり自分の言葉を自由に駆使するように奨励されるものであるという。その意味で、「教室の中でよりも外で、より多くの言葉の学習がなされる」と考え、言語発達の機会は単に学校生活を通じて与えられるにとどまらず、就学前の段階から準備されてよいと考えている。このことは、言語表現の何ものにも抑制されない自由さを主張することから、さらに、言語の獲得期に正しい言葉を教えられることの大切さへとわれわれを導いていく。

ベイリイは、言語の訂正には、適当な時期を選ぶことが必要であり、そうしてこそ、子どもの言語発達にとって修正は恩恵となると説いている。——たとえば「子どもが片言をでたためにしゃべるのを黙認するのではなく、適切な時期に間に入って、その子が知らない語彙を教えたり、明らかに間違っていて理解している語句

をもっと明確に区別できる個々の音に分けてやったり、あるいは文法の型を正してやったりする」のが、（中流階級の）「分別ある母親」であるという。

三、「修正」とは

この「修正」について、ビビアン・M・ホーナー (Vivian M. Horner) は「社会的に不利な立場の人々の言語に関する誤解、(Early Childhood Education Rediscovered, Edited by Joe L. Frost, P. 405~408)」の中で、世間一般の理解が彼らの真実を歪めていることを指摘して述べている。ホーナーによれば彼らが言語的な面で中流階級の人々より劣っているのは、知能が低いためでもないし、物を言う能力が欠けているためでもない。それは、中流家庭を規準に標準化された知能検査が物語る結果であり、方に特徴づけられる発音のパターンと発音の分節化能力の欠陥を混同した結論である。

社会的に不利な立場の人々にとって、修正とは、言語の治癒（器管の欠陥に伴なう病理学の問題、話す能力の欠陥を対象領域とする）ではなく、言語の教育（行動的に決定される問題で、言葉の欠陥を対象領域とする）である。これは、中流階級語を標準とする英語至上主義を排すことによって実現され、所属する階

級によって人間を優劣のふるいにかけることをやめて、そこに、両者は異なっている、(difference) という概念が芽生えるときに可能となることを説いている。

たとえば、ニグロの子どもは、彼自身が所属しているニグロのスピーチ・コミュニティの音声体系と一致した発音をしているにもかかわらず、"come with me" と言ったりすると、それは置き換え、あるいはゆがみとして分類され、訂正される。いつもいつもたえまなく話す行為が訂正されることに伴う危険は、先のペイリイも指摘するように、その子がことばを用いて意志を伝達しようとするのが阻害され、それから先をしゃべろうとすることが抑制されることである。

その意味でたえまない訂正は、子どもにとって一つの罰の機能をもっている、がこのとき、階級間の比較研究に、それぞれは別のものであるという概念を導入するか、あるいは、比較研究の意図を離れて、非標準語のとり扱いを考えると、次のことが示唆される。——社会的に不利な立場の子どもたちは、英語を話すようになると、彼の満足を保証するのに十分なほど、すくなくとも、彼の将来の教育に対して制限を加える要因が、どんなものであれそれをとり除くことができるまで、彼は生まれついた共同体の言葉あるいは方言で、言語的になるのが良いようである。この

ように人は言語を駆使する腕前が、生まれついた場の「純粋」な言葉(あるいは方言)においても、第二の英語においても、満たされた気持になることが必要である。

四、ハンディキャップに対する補償的接近

社会構造の根本的な不均衡から来る幼児の言語能力の差は、年少時(最適の時期は、三〜四歳の間)に、社会経済的に恵まれていない子どもたちに、補償的な教育をすることによって、解決の見込みを得ることを論じているものに、キャロライン・スターン(Carolyn Stern)の「幼児の言語能力」(Young children 1966, 10)がある。

これは、「Kitchen sink」 eclecticism (台所の流しに最も適当と思われるものを選択してつくろうという考え)に基づいて、過去の不利を短期に補おうとする試みであり、カリフォルニア大学では、これを早期幼児言語計画(the Early Childhood Language Program)として具体化する。

この計画を推進するにあたって、スターンは、聴覚の識別力、言語反応力についての比較研究を行ない、さらに補充的研究によって、教授計画を立てる場合に訓練の目標を明確にすることの必要を説いている。

聴覚識別検査では文化的に恵まれない子どもたちが中流階級の子ども等比べて、非常に劣っていることを実証しようとしたが、スターンがとり扱った集団は、文化が異なる故に、何が意味されているかがわからないようであり、概して、与えられた課題を理解することが困難であった。このことは、ウェッブマン聴覚識別検査をはじめその他の諸検査が、中流階級に属する者のために考案された検査であり、しかも六歳以上の者に適用されるものであることを同時に明らかにした。(識別力の検査は理解力の検査ではないので、このような子どもは対象からはずされた)

この研究で注目されるもう一つの点は、言語反応の比較研究の結果、限定された背景をもつ子どもたちは、言語的能力に欠けるが非言語的能力にはすぐれているという一般通念が覆えられたことである。スターンによると、ここで採用された子どもたちは、能力のうちで後者を測定するための検査といわれる Goodenough Draw-a-Man Test と Peabody Picture Vocabulary Test と同様中流階級の子どもに有意に劣る結果を示したことが報告されている。

また、社会的に不利な集団で、年長の子どもは年少の子どもたち比べて、どの場合にも忍耐強さに欠けたことは、能力、動機づけの発達に累積的欠損をもたらしていることを明らかにしている。

る。

これらの結果からスターンが主張することは、幼稚園本来の役割は社会化を促進することであって、概念的認識的学習は学校に依存していればよいと考える人々は、たいてい自身が中流階級に属する人である(中流階級では、彼らの日常生活の一部として適当な知能刺激が与えられている)。けれども、適当な刺激が剝奪されている子どもたちにとって、そうすることは両者の相違を無視した、削除から来る欠損を助長するということである。

五、ハンディキャップに対する「教育」共同体的接近

低所得家庭の、言語障害を有する子どもたちのために、アメリカには Head Start Program というのがあるが、ルース・フレイス、ミリアム・ミラー、レス・プラット、コウ・ライン・ワレンは、中流家庭と低所得集団の共同で、解決をはかろうとする企画 C. A. P. E. (Community Association for Preschool Education) を紹介してゐる。(「Head Start に対する非分離的接近」 Young Children 1969, 5)

これは、そもそもは社会計画協議会 (The Council of Social Planning) の協力を得て、経済的に恵まれない家庭の子どもたち(奨学)資金を提供するかわりに、親の参加を求めたことに始

まるが、一つには、保育園での教育的機会に、低所得層の親が気づくようになるのを助ける目的で考案されたものである。

具体的には、低所得の親は（オプザーバーとしてではなく）参加者（パーティシパント）として、プログラムのあらゆる面での遂行に、先生および中流階級の親たちとともに、直接参与し、一時間につき一ドル五〇セントの報酬が助力者の名目で支払われた。

このようにして、低所得の親は、正当な経済的便宜に恵まれながら、子どもたちと交わることによって、彼らが社会的に発達していくその過程をつぶさに観察し、さらには、先生やより多くの経験を積んだ親を観察することによって、子どもを育てることに ついての知識や、栄養、健康および社会福祉についての知識を得ていった。

子どもたちにとっては、中流階級の子どもの相互交渉を通じて、言語発達および概念形成における直接の経験が与えられ、自分自身の家族や近隣社会で、おとなから信頼される機会が与えられることが望まれた。

四十名の子どもたちに起こったことについて一概に論ずることは困難であるとしながら、フレイスらは、ある子どもは、身体的な外見にとらわれることなく中流階級の子どもから、保育園で遊び終わってから家に遊びに来るように招待され、英語をほとんど

または全く話さなかった子どもたちが、話すようになり、自分が考えたことや体験したことを他の子どもたちと分け合うようになったことを報告している。

けれども、子どもたちにとって、C・A・P・Eの真の価値は、自分たちの親を、その共同体で容認された貢献しつつある成員として、すなわち、たよりがいがあり、自分たちにとって必要であるという新しい役割を見出したことにある。これは、おとなと子どもとの間に信頼しあう感情を育てるのに役立ち、さらには異なる文化を容認することへと発展していった。

このように、この計画は社会経済的に水準を異にしている者間で、より意義深い相互交渉を可能にしたことが強調されている。

六、比較研究の問題点

階級間の差の解釈に多くの努力が払われている傾向の中で、このC・A・P・Eの試みは、共通の基盤を求めていくことによつて得られた報告といえるが、それにしても、方法論上の問題として、比較研究の姿勢がすべからず、中流階級集権主義に根づいている事実は、我々の計り知ることのできないアメリカ社会の複雑さを推察するよりほかはないようである。しかも、比較研究を採

る研究者自身が、この事実気づいており、フレイスらは次のように述べている。——中流階級の行動様式あるいは価値観を最上のものとするには異論があり、論争の余地を残しているけれども、好むと好まざるとにかかわらず、それはアメリカ社会では支配的な通念である。——また、先のホーナーは、どの文化がその時代の優位を占めるかは、単に歴史の偶然にすぎないとしながら、この見地に立ち、スターンは、これを「運命」として弁解しているに至っては、我々を惹きつけるよりもむしろ、遠く傍観の境地にとどまらせるのみである。

七、就学前教育のあり方

ともあれ、言語教育に限らず、一般に子どもの就学前教育のあり方として、これらの文献から、

① 人間と人間がお互いに信頼しあう感情で結ばれ、助け合うことができるときに、個々人が持っているものをさらに伸ばすことができること。

② 自分の担う役割について、また他の人が担う役割について、そこに固有の意義を見出し、欠くことが出来ないという自覚をもつ時に、差別を越えた人間関係が育つこと。

③ 「評価」とか「測定」は、個々人の差を差としてとらえる

ことに終始するのではなく、「異なる」が故にその個人が伸びていく手がかりを示すものであることなどを示唆される。

八、幼稚園からの報告——その一

——幼稚園の読み書き算数

視点を転じて、幼稚園の現場に近い立場からの、文字教育に関する報告には、西ニューヨーク幼稚園計画委員会の「幼稚園と読み書き算数」(Young Children, 1965. 5)がある。

近年、幼稚園で読み書き算数を扱うのは当たり前のことになっているが、それは必ずしも良いこととして認められるわけではない。中には、幼稚園というものは小学校に入ってからからの学業成績をたすけるものであるとさえ考える人もあるが、それは、読み書き算数の学習を単に習慣的な一定の記号の学習と考えることに由来している。

この委員会のメンバーたちは、こうした現状に批判の目を向け、これを小学校教育課程を硬直させきっている最近の風潮に結びつけている。

幼稚園の段階での読み書き算数は、五歳児は五歳児であって、六歳児とは違うという事実を眼を向けると、六歳児に合う方法と五歳児のそれとは自ずと異なり、ましてや、たとえば「2と2

を足したら4ですよ、ごらんなきいディック。注意してよく見るのですよ」といったブッシュ・ブル式の教授学習法の類以上のものであることを明らかにしている。

読みの指導で指摘されることは、子どもが言葉という表象を扱いはじめる前に、言語経験の素地となる経験を大切にし、それを援助していくということ。具体的には(1)同じ年齢の子どもたちとの、また、おとなとの会話状況で気持よく感ずること、(2)大きな集団に入る前に、一人または二人の会話状況によって適度な自信を覚えることであるという。また言葉の発達というのは、いっしょに時を過ごしている間の何としない雑談、物語や詩を読むこと、いっしょに計画をたてること、空想して遊ぶこと、小集団で話し合うこと等の活動に直接かかわり、それを楽しむ中で起きるものであり、これらの活動を通して、子どもは適当でしかも意味ある語彙を獲得し、読みを学習していくという。

読みは、単語に音声で応ずることで、その単語を知っているということでもない。それは印刷された単語が伝える意味を理解した上に成り立つ行動である。その意味で、子どもが後に概念を明確にし、言語経験を豊かなものにしていくためには、実際にそのものに触れることによって、見、聞き、味わい、においを嗅ぎ、感触をたしかめることが大切である。絵本やフィルムがいかに

に豊富にとり揃えられても、それらは単にある事物、ある事象についての一部の感覚を満足させるにすぎない。したがって、もしも、言語経験の素地が培われる時期に、このような体験的接触が与えられないならば、読みの次の段階、すなわち、表象と表象の連合への移行に手間取るであろうと述べている。

また、読みは、聴覚の識別力、視覚の識別力の発達と相まって発達するとの視点から、幼稚園でのプログラムのすすめ方について述べており、読みの学習は、教師による活動および教材の多面的な認識によって、幼稚園での生活のすべて有位相から導かれることを、実際の指導に即して明らかにしている。

書くことは、読みの活動のほかに、筋肉の運動が関与している。したがって書くことの発達には筋肉の発達が問題になる。

幼稚園のある朝の教室風景をみわたすと、ある子どもたちは絵を描いており、またある子どもたちはやわらかい木をのこぎりで挽き、釘を打っており、他のものたちは粘土やゴム粘土で遊んでいる。また一方ではグループになってお手玉の投げあいをしている。このとき子どもたちの注意はいま遊んでいるものに注がれているけれども、彼らは書く学習においてまさに欠くことのできない段階を踏んでいるということがができる。なぜならば、彼らは、投げる、捕る、のこぎりを挽く、打つなどの大きな筋肉運動か

ら、模型製作、描画等のより小さな筋肉運動までの発達を起こしつつあるからである。

そして、一連の活動を終え、そこに作品が残ると、その子はその上に自分の名前を書きたいと思うのかもしれない。子どもというものはそうすることに現実的な目的をもっており、自分の名前はその子のもっとも特色ある所有物で、しかもそれは非常に大切なものである。

また、子どもはそれがその子のものであることを表わしている、ロッカーの上の絵札を手がかりに、自分の名前を認めるようになり、それを書いてみようと思うようになる。彼は機会をもらえて、先生が名札をくれたりすると、それをうつそうとする。この段階では、それはまだ書くこと(Writing)ではなくて、模写すること(Copying)であり、書くことの一部とみなされるものであるが、ここに示される二つの例から、幼稚園の先生は子どもが熱心に書くようとしているとき、正しくその綴りを書けるよう手助けすることが、書く学習の指導となることを示している。

算数。幼稚園の先生は、数量的な思考の発達の一助ともなっているという。

幼稚園の日常生活は、非常に現実的で、数量に関する話題に富んでいる。たとえば、朝の出席調べの「きょうは何人の男の子が

来れなかったでしょうか？」というのから、遊び時間の「あなたの汽車は何両？」「あなたはもうどれくらい糊がほしいの？」

「この積木は、わたしたちの建物には大きすぎるかしら」「リンゴソースには $\frac{1}{2}$ カップのおさとうがいるわ」など。

おやつ時間の「ジュースのコップはみんないっぱいです」

あるいは、

歌とリズムの時間の「大きな輪でスキップしなさい」「この音はもう一つのこの音より高い音ですか？」とか、

お話の時間の「大きな本」「次のページ」「短いお話」「一番上の絵」「おしまい」など。

また、帰りの時間の「時計が言っています。もうおうちへ帰る仕度をする時間ですよ」というのまで、あるいは、

一番最後の「これは誰のお靴ですか？」「さようなら、またお会いしましょう」のように、実に話題が豊富であり、これらはみんな、子どもが日常生活の中で起きる数量的な問題の解決へと導いていく。

すなわち、「どのくらいたくさん」「どれだけ残っているか」

「さらにどれだけ」……という質問に答えることは、加法減法の概念のレイネスを築き、時計やカレンダーを時の尺度として用いること、もの大きさ(太い、細い、大きい、小さいなど)を

比較すること、距離（遠い、近い、ここ、そこ）、速度（早い、遅い）を比較すること、そればかりでなく位置の概念（前、次、上、下、後等）やお金を使う経験は、測定とか幾何学のレディネスを提供し、部分、全体、半分、少し、というような意味を知らせることは、分数の概念を基礎づくる。

幼稚園のこのような数量的経験をを通して五歳の子どものほとんどは、5までの対応関係を理解しており、実際に用いることを期待されてもできるであろうし、また自分の住所、年齢、電話番号から、序数の使用も可能であることを示しながら、幼稚園での読み書き算数は、この段階に合った方法によるならば、子どもの生活をより豊かにすることを説いている。

九、幼稚園からの報告—その二

—言語の学習に耳を傾けること

次に、ウッドワード (Virginia A. Woodward) は、読み書き算数の前段階に、聞く段階があることを「幼児は自分自身、『聞く』経験を手ほどきする」(Young Children 1965. 10)と題して述べている。

最近の文献は言葉の巧みさおよび耳で聞き分けられることの発達に重きが置かれているが、ウッドワードはここで注意深い指導があ

りさえすれば、子どもたちは聞き分けられる力の発達を自ら促進していくことを示している。

人生の最初の数年間、耳は音や意味や考え、事実の忙しい変容器官であるが、幼児はこのような感覚的な体験を通して、さまざまな学習をしていく。聴覚の経験は正式な導きを受けなくても確立するので、学校外での生活と学習にはなくてはならない要素であるが、同時にまた学級運営にもなくてはならない要素であることを、我々はずっと注意する必要があるのではないかと説いている。というのは、教師たちは、これまで自分に都合のよいやり方で、聴く練習を考える傾向にあり、我々は多くの子ども中心の聞く経験を見落としてきたようだからである。

ここでは教師は、子どもたちの言語化が助長されるような聞く環境を、また聞くことが価値のある環境を、社会的総合交渉が認められるような環境を、聞く目的が広いきまざまな経験によって豊かにされるような環境を、あるいは子どもたちが聞くこととするものを選択できるような環境をつくりあげること努力を払うようになることを期待しながら、一方では、子どもたちは、いろいろな意味をもつ音にあふれる環境の中で、耳に入る音についてのいくつかの意識的、無意識的な選択をしていることを示している。

子どもたちの中にはいろいろな音に気づいている者もいれば、遊びに夢中なあまりに、外の音は何も聞えない者もいるが、概して精神錯乱を起こさせるような音を追い出し、心豊かにする音と取り入れようとするものであり、他人の言うことに耳を傾けていくようなものである。子どもたちは、お互いの経験を分けあう機会を求めている。

彼らは困った問題の解答を捜し、自分自身の発見を見出そうとするとき指導を求めて他の人に意識を向ける。たとえば四歳になるエリーザは「私は黒くしたいのよ」と言いながら赤と青の絵の具を用いていた。そこで先生は「あなたは何色がほしいのか」と尋ねたが、彼女はそのままこの二色を混ぜることに専心していた。そして二枚目の紙をとり出し、今度は青と緑を選んで混ぜながら、「私は黒くしたいのよ」とくり返して言った。そこで先生は「リーザは黒くしたいと思っています」とくり返して言ったあとすぐ続けて「けれど、リーザは何か別の色にしたいと思っているのかしら」とつけ加えた。するとリーザは黄色をとり、それをいま描きつつづけている絵にまぜて塗った。

リーザが二枚目の絵を描きあげたとき、先生は彼女にもう一枚描きたいかどうかをたずねた。リーザは三枚目の紙をとり、また「私は黒くしたいのよ」をくり返しながら再び赤と青の絵の具を

手にとった。彼女がその二色を混ぜあわせるところで先生はその絵に緑色を加えた。それによって絵が黒に変わると、リーザの目は輝いた。そして「私は黒くしましたよ」と大きな声で叫んだ。

そこで先生は「あなたはおうちに帰って、お父さんとお母さんにお話ししましょうね。あなたはもうやめて黒くしたのリーザ」と聞いた。リーザは「赤と青で紫になったの。そして緑が黒にしたの。わたしみんなに教えてあげよう」と答えた。先生がみんなの注意をひいて、リーザは自分の発見を話しはじめた。

おやつ時間に、ひとりの子が、リーザの発見物語を彼女が使った言葉をそっくりまねてくり返した。

このようにして子どもは他人の言葉に耳を傾け、経験を分かちあうが、それは先生によってばかりでなく子どもたち同士遊びの中でも行なわれ、時には行為によってお互いの注意を惹きあう例がいくつか示されている。

また先生たちは、子どもが反応しなかったり、かろうじて見つけている時、その子は何もしていないのではないかと気をもむけれども、みかけに反してその子は何かを学習している場合があり、ある特別の状況あるいは特別の考えに反応していることをよく見極めた上で、働きかけることが大切であると述べている。